

入試成績の追跡研究 (5)

小 高 晋 二

1. はじめに

本稿は、大学入学者選抜試験における学力試験の成績（以下、入試成績と記す）と、大学在学中の学業成績（以下、学業成績と記す）との関連、および、高校在学中の成績（調査書記載の教科別評定平均値の平均、以下、調査書成績と記す）と、学業成績との関連、また、大学において特に良い学業成績を修めた者と、逆に特に悪い学業成績を残した者が、入試成績と調査書成績においてはどのような状態であったなどを調査し、より適切な大学入学者選抜のあり方を検討するためのひとつの資料を得ることを目的として、従前より本学学生を対象として調査してきたものの一部をまとめたものである。

なお、この調査結果は、東京都区部にある一私立短期大学で、入学試験科目としては2教科（後に詳説）を課しているケースであることをあらかじめお拒りしておきたい。

2. 対 象

今回発表の調査対象となった学生達は、昭和57年4月および昭和58年4月に入学し、昭和59年3月および昭和60年3月まで在学し、連続して2ヶ年間の学業成績を残した者全員である。但し、入学者選抜試験を受験していない学内推薦入学者は比較の資料を欠くので、また、入学はしたが途中で除籍になったり、休学や退学をした者、それに加えて、勉学の意志に乏しく著しく単位未修得の者などについては、2ヶ年間の十分な学業成績を残していないので、これを調査対象から除外してある⁽¹⁾。従って、今回の調査対象となった学生達は、結局、昭和57年度入学者で416名、昭和58年度入学者では512名であった。これら対象となった学生達を便宜上その出身高校によっていくつかのグループ（群）に分類し、開設学科（専攻を含む。以下、学科とのみ記す）別にその人数を示すと、表1、表2のようになる⁽²⁾。

もちろん、調査書成績に関する詳細かつ厳密なデータを得たいのであれば、各高校別に調査すべきなのであるが、1校からデータを得るに足る多数の入学者を出している高校がそう多くはあるわけではないので、およその傾向を見るという程度のことでB-G群に分類したわけである。この6群の分類は、以下の如く、高校の設置されている住所と設置主体とを基準にして行った。す

なわち、

B群 東京都内，国・公立高等学校

C群 東京都内，私立高等学校

D群 首都圏3県（千葉県，埼玉県，神奈川県）内，国・公立高等学校

E群 首都圏3県内，私立高等学校

F群 首都圏3県外，国・公立高等学校

G群 首都圏3県外，私立高等学校

である。

表1 昭和57年度入学，科別・高校群別調査対象人数

科 \ 高校群	B	C	D	E	F	G	計
W	15	10	20	2	11	1	59
X	33	18	35	6	17	6	115
Y	44	26	50	4	29	4	157
Z	26	16	32	3	7	1	85
計	118	70	137	15	64	12	416

表2 昭和58年度入学，科別・高校群別調査対象人数

科 \ 高校群	B	C	D	E	F	G	計
W	10	4	10	4	13	1	42
X	34	41	66	13	29	7	190
Y	38	43	72	7	28	6	194
Z	23	11	35	2	15	0	86
計	105	99	183	26	85	14	512

3. 資料と方法

(1) 資料

資料として用いたものは、本学に保管されている入試判定に関する諸資料、学生の成績に関する諸資料、高校より送付された調査書等である。

(2) 方法

本研究においては、入試成績、調査書成績および学業成績三者の相互の関連を比較検討するわけであるので、これら三者が、それぞれ比較検討し易いように数値化されていることが必要かと思われる。以下、ここで入試成績、調査書成績、学業成績と称するものについての説明と、その数値化について述べておきたい。

まず、ここで入試成績というのは、入試で課せられる学科試験（国語〔100点〕および英語

[100点]、それに、科によっては作文〔20点〕も加えられる)の合計点に、調査書得点(評定平均値の平均を2倍して4捨五入した数値)を加えた総合点のことであり、最高点は210点(作文が課せられた場合には230点)である。

次に、調査書成績であるが、これは、調査書記載の教科別評定平均値の平均値のことであり、既に数値化されているので特に数値化の必要はない。

最後に学業成績であるが、これは、短大在学2ヶ年間に履修した科目についての評価の総計のことであり、この数値化にあたっては次のような方法をとった。すなわち、まず、学生各自が履修した各科目ごとの評価をA、B、C、Dに区分し、Aには3点、Bには2点、Cには1点づつの得点を与えた(Dは0である⁽³⁾)。次に、学生各自ごとに、評価Aの科目が何科目あったか、評価Bは何科目かというように、評価ごとの数を集計し、その数ごとに前述の各得点を乗じたものの合計を各自の総合点とし、それを履修科目数の合計で除した数値を、当該学生の学業成績の数値としたわけである⁽⁴⁾。従って、履修科目のすべてが評価Aであるならば、その学生の学業成績の数値は、3.00ということになる。

なお、相関係数の算出にあたっては、比較し易いように、場合によっては、数的処理をした⁽⁵⁾。

4. 結 果

(1) 入試成績と学業成績との関連について

表3、表4は共に、入試成績の段階ごとに、それぞれ該当者が何人づついたのか、また、それぞれの段階別に、該当者の学業成績を平均するとどうなるのか、さらに、その学業成績平均値は、その学科全員の学業成績平均値と比較すると、どの程度の差があるのか、といったことを学科別に示したものである。すなわち、今、W科を例にとって説明を加えると、まず、入試の総合点は高得点から合格点ギリギリの点数までの幅があるので、これを原則として一定の点数幅で区分し、12段階にしたということである。これが入試成績段階のⅠ～Ⅻである。該当人数というのは、12段階に区分したそれぞれの段階ごとに、その範囲の得点をした者が何人づついたかということである。仮りに5点刻みで入試成績段階を区分したとすれば、例えば、第Ⅰ段階は155点～151点、第Ⅱ段階は150点～146点という具合になり、それぞれ該当者が2名ずつであったということである。学業成績平均値というのは、該当者全員の総合点の合計を該当者全員の総科目数の合計で除した数値のことである。例えば第Ⅴ段階の場合、該当者は8名いて、総得点を合計するとM点となり、これを総科目Nで除するとその数値が2.35になったということである。科平均値との差というのは、当該科全体の平均値と各段階の平均値との差のことであり、W科の場合であれば、59名の総合点の合計を59名の総科目数で除した数値、2.33が全体の平均値であるので、この平均値と第Ⅴ段階の平均値2.35との差は0.02であるということである。この際▼印が付いているのは、科全体の平均値を下回っている場合である。

なお、各科を通じて、入試成績の段階区分の方法について一言付け加えるとすれば、次の点である。すなわち、入学者の入試成績というのは、飛び抜けて高得点の場合から、不合格者と1点差の場合まで、非常に点数差があるわけであるが、これを1点ごとに区分して調査しなければならない積極的な理由は見い出せないで、ある一定の点数ごとに区分して12段階にグループ分けしたということである。但し、第I段階だけは、一定の点数幅を越えている場合もある。何故ならば、12段階に収めるためには、飛び抜けた高得点者がいても、それを第I段階に含めなければならぬからである。

表3 昭和57年度入学，科別・入試成績段階別該当人数および学業成績平均値一覧

科	入試成績段階	I	II	III	IV	V	VI	VII	VIII	IX	X	XI	XII	計
W	該 当 人 数	2	2	0	2	8	2	2	15	9	15	2	0	59
	学 業 成 績 平 均 値	2.44	2.39	—	2.42	2.35	2.45	2.19	2.30	2.41	2.27	2.31	—	2.33
	科 平 均 値 と の 差	0.11	0.06	—	0.09	0.02	0.12	▼0.14	▼0.03	0.08	▼0.06	▼0.02	—	—
X	該 当 人 数	5	5	3	4	3	9	6	18	15	28	19	0	115
	学 業 成 績 平 均 値	2.50	2.35	2.51	2.16	2.30	2.39	2.33	2.20	2.24	2.16	2.16	—	2.24
	科 平 均 値 と の 差	0.26	0.11	0.27	▼0.08	0.06	0.15	0.09	▼0.04	—	▼0.08	▼0.08	—	—
Y	該 当 人 数	6	1	2	5	9	12	18	30	30	43	1	0	157
	学 業 成 績 平 均 値	2.25	2.40	1.93	1.99	2.27	2.19	2.31	2.19	2.10	2.18	1.73	—	2.18
	科 平 均 値 と の 差	0.07	0.22	▼0.25	▼0.19	0.09	0.01	0.13	0.01	▼0.08	—	▼0.45	—	—
Z	該 当 人 数	1	0	3	2	6	3	13	16	17	24	0	0	85
	学 業 成 績 平 均 値	2.63	—	2.41	2.23	2.47	2.44	2.38	2.36	2.29	2.30	—	—	2.35
	科 平 均 値 と の 差	0.28	—	0.06	▼0.12	0.12	0.09	0.03	0.01	▼0.06	▼0.05	—	—	—

表4 昭和58年度入学，科別・入試成績段階別該当人数および学業成績平均値一覧

科	入試成績段階	I	II	III	IV	V	VI	VII	VIII	IX	X	XI	XII	計
W	該 当 人 数	1	0	0	2	1	4	9	6	9	10	0	0	42
	学 業 成 績 平 均 値	2.59	—	—	2.63	1.96	2.38	2.39	2.35	2.34	2.35	—	—	2.37
	科 平 均 値 と の 差	0.22	—	—	0.26	▼0.41	0.01	0.02	▼0.02	▼0.03	▼0.02	—	—	—
X	該 当 人 数	10	3	8	14	12	10	13	22	20	30	22	26	190
	学 業 成 績 平 均 値	2.33	2.19	2.52	2.15	2.12	2.33	2.25	2.11	2.19	2.28	2.18	2.20	2.22
	科 平 均 値 と の 差	0.11	▼0.03	0.30	▼0.07	▼0.10	0.11	0.03	▼0.11	▼0.03	0.06	▼0.04	▼0.02	—
Y	該 当 人 数	4	4	5	4	16	16	19	24	42	36	24	0	194
	学 業 成 績 平 均 値	2.09	1.96	2.28	1.89	2.17	2.10	2.07	2.02	2.24	2.18	2.10	—	2.13
	科 平 均 値 と の 差	▼0.04	▼0.17	0.15	▼0.24	0.04	▼0.03	▼0.06	▼0.11	0.11	0.05	▼0.03	—	—
Z	該 当 人 数	3	0	1	3	6	6	8	16	19	24	0	0	86
	学 業 成 績 平 均 値	2.18	—	2.38	2.66	2.52	2.53	2.57	2.37	2.41	2.41	—	—	2.43
	科 平 均 値 と の 差	▼0.25	—	▼0.05	0.23	0.09	0.10	0.14	▼0.06	▼0.02	▼0.02	—	—	—

要するに、この表3、表4は、入試成績と学業成績との関連を生の数値で示したものである。

さて、これらの表から読みとれる結果の検討に入るわけであるが、まず注目していただきたい

のは、各科とも、科平均値との差の欄であって、この欄の各段階ごとの数値の大きさと、▼印の有無を見れば、各科の入試成績と学業成績との関連についてのおよその傾向が分かるわけである。すなわち、これらの表において、右側、つまり、入試成績段階が下がる方に▼印が集中し、左側、つまり、入試成績段階において上位の方は無印であれば、その科においては、入試成績と学業成績との関連が深そうだということであり、また、▼印が表の右側に集中することなく、全体にわたって点在するという場合には、入試成績と学業成績との関連は浅そうだということなのである。そして、▼印が右側に集中している場合でも、そこに示される数値が、Ⅻ段階に向うほど大きくなり、無印の場合はⅠ段階に向うほど大きくなっていけば、両者の関連はより一層深そうだということなのである。但し、これらの表においては、該当者が1名の場合であっても記載してあるので、全般的な傾向を見るためには、少人数しか該当者がいない段階は除外して見た方がよいであろう。

ここで表3、表4について、各科ごとに入試成績と学業成績との関連の傾向を見てみよう。まず表3のW科の場合、▼印は表の右側だけであるので、一見すると両者の関連は深そうであるが、個々の数値を見ると、入試成績において第Ⅸ段階の9名の学業成績は入試成績第Ⅴ段階の8名を上回ったりしているので、一概には関連が深いとは云えそうにもないのである。次のX科の場合、▼印が第Ⅳ段階に付いており、しかもその学業成績は科の最低グループのひとつであるのでこれも十分に関連があるとは云えそうにもない。また、Y科の場合は、第Ⅲ、第Ⅳ段階に▼印が付いていたり、第Ⅶ段階の18名の平均が第Ⅰ段階6名の平均を上回る学業成績を残していたりするので、関連はむしろ少いと云えそうである。Z科の場合、第Ⅳ段階に▼印が付いているが、ここは該当者が2名だけであるのでこれを除外視すれば、残りの数値は比較的入試成績段階に対応しているようである。表4に移ろう。W科、第Ⅴ段階に▼印があるが、これは1名であるので、除外すれば、残りは入試成績にそこそに対応していると云えそうである。次のX科、Y科、Z科については、入試成績において最上位に属する段階にまで▼印が付いているので、残念ながら、入試成績と学業成績との関連が深いとは云いにくいと思われる。

以上は、▼印の有無と、そこに示された数値とに注目して、入試成績と学業成績とのおよその関連を見たわけであるが、両者の関連をより明確に把握するために、両者の相関関係を偏差積法によって算出してみると、表5のようになる。但し、この数値の算出にあたっては、ひとつの段階に該当者が4名以上いる場合のみを対象とし、1段階を1人格とみなして計算をした。つまり、ひとつの段階の該当者が少数の場合には、僅か1名の例外的存在によって、平均値が大きく左右され得るので、一応ひとつの段階に該当者が4名以上いる場合に限定したということである。なお、参考のために、過去の数値も載せてある。

この表5を見ると、入試成績と学業成績との相関係数の非常に高いのが57年度のZ科であり、58年度のW科、57年度のX科、58年度のZ科がこれに続いている。一方、58年度のY科はマイナ

表5 入学年度別、科別、入試成績と学業成績との相関係数

科 入学年度	W	X	Y	Z
58	0.800	0.410	-0.239	0.727
57	0.276	0.761	0.114	0.966

参考

科 入学年度	W	X	Y	Z
56	—	0.905	0.904	0.103
55	—	0.869	0.482	0.444
54	—	-0.079	0.739	0.143

スの相関という結果であり、57年度のY科、W科も相関は低い数値であった。

要するに、入試成績と学業成績との関連は、この調査を見る限り、高い正の相関の場合から負の相関の場合まで、いろいろな場合があったということなのである。また、参考に挙げた過去の数値を見ても上記のことは指摘できるわけで、これらの数値が高い正の相関を得るにはどうすればよいのかということが今後の検討すべき課題であると思われる。

(2) 調査書成績と学業成績との関連について

表6・表7は、表3・表4を作成したと同様の方法で、調査書成績を一定の段階ごとに区分し、各段階ごとに、それぞれ該当する人数と、その学業成績の平均値とを示したものである。⁽⁶⁾科平均値との差とは、当該科全体の学業成績平均値と各段階別の学業成績平均値との差のことであり、その際、科全体の平均値を下回っている場合には▼印が付いている。従って、調査書成績の良い者は学業成績も良く、調査書成績の良くない者は学業成績も良くないと仮定すれば、まず、

表6 昭和57年度入学、科別・調査書成績段階別該当人数および学業成績平均値一覧

科	調査書成績段階	I	II	III	IV	V	VI	VII	VIII	IX	X	計
W	該 当 人 数	1	0	4	11	21	15	7	0	0	0	59
	学 業 成 績 平 均 値	2.67	—	2.34	2.54	2.36	2.16	2.26	—	—	—	2.33
	科 平 均 値 と の 差	0.34	—	0.01	0.21	0.03	▼0.17	▼0.07	—	—	—	—
X	該 当 人 数	1	0	3	15	30	34	24	7	1	0	115
	学 業 成 績 平 均 値	2.88	—	2.54	2.36	2.44	2.21	2.00	2.05	1.55	—	2.24
	科 平 均 値 と の 差	0.64	—	0.30	0.12	0.20	▼0.03	▼0.24	▼0.19	▼0.69	—	—
Y	該 当 人 数	0	3	5	33	49	46	16	5	0	0	157
	学 業 成 績 平 均 値	—	2.61	2.48	2.37	2.29	1.99	1.91	1.95	—	—	2.18
	科 平 均 値 と の 差	—	0.43	0.30	0.19	0.11	▼0.19	▼0.27	▼0.23	—	—	—
Z	該 当 人 数	0	3	7	16	28	24	5	2	0	0	85
	学 業 成 績 平 均 値	—	2.46	2.67	2.32	2.34	2.34	2.11	1.94	—	—	2.35
	科 平 均 値 と の 差	—	0.11	0.32	▼0.03	▼0.01	▼0.01	▼0.24	▼0.41	—	—	—

表7 昭和58年度入学，科別・調査書成績段階別該当人数および学業成績平均値一覧

科	調査書成績段階	I	II	III	IV	V	VI	VII	VIII	IX	X	計
W	該 当 人 数	0	0	9	13	8	9	3	0	0	0	42
	学 業 成 績 平 均 値	—	—	2.47	2.35	2.35	2.37	2.22	—	—	—	2.37
	科 平 均 値 と の 差	—	—	0.10	▼0.02	▼0.02	—	▼0.15	—	—	—	—
X	該 当 人 数	0	5	11	25	48	53	38	9	1	0	190
	学 業 成 績 平 均 値	—	2.46	2.49	2.37	2.28	2.14	2.15	1.92	1.86	—	2.22
	科 平 均 値 と の 差	—	0.24	0.27	0.15	0.06	▼0.08	▼0.07	▼0.30	▼0.36	—	—
Y	該 当 人 数	0	5	9	34	61	54	23	8	0	0	194
	学 業 成 績 平 均 値	—	2.51	2.41	2.22	2.17	2.14	1.91	1.58	—	—	2.13
	科 平 均 値 と の 差	—	0.38	0.28	0.09	0.04	0.01	▼0.22	▼0.55	—	—	—
Z	該 当 人 数	1	1	9	18	29	24	4	0	0	0	86
	学 業 成 績 平 均 値	2.79	2.44	2.61	2.49	2.38	2.41	2.24	—	—	—	2.43
	科 平 均 値 と の 差	0.36	0.01	0.18	0.06	▼0.05	▼0.02	▼0.19	—	—	—	—

▼印が表の右側に集中し，そして，数値のみに注目すればI段階に向う程その数値が大きくなり，またX段階に向う程その数値が大きくなるはずである。逆に，調査書成績と学業成績との関連が小さいとすれば，▼印は表の全体に点在するはずである。

さて，表6・表7を見てみよう。まず全体として気の付くことは，両表を通じて，▼印の所在が各科とも表の右側に集中しているということである。また，科平均値との差の欄における数値そのものに注目すれば，その絶対値が概して第I段階，第X段階の両極に向う程大きくなっていることがわかるであろう。つまり，一言にして言えば，高校時代の学業成績は，大学での学業成績と深い関連がありそうだということなのである。例えば，表6のY科の場合を見ると，第VII段階と第VIII段階の数値を逆転させれば，調査書成績と学業成績とは見事に対応するし，表7のY科の場合には，全くそのまま調査書成績と学業成績とは対応しているのである。その他の場合も，大幅な前後の入れ替えなしで，概して，調査書成績は学業成績と対応していると言えるであろう。

次に，前項同様，調査書成績と学業成績との関連をより明確に把握するために，両者の相関関係を偏差積法によって算出してみると表8のようになる。但し，ここでもひとつの段階に該当者が4名以上いる場合に限ってある。その理由は前項において述べたことと同様である。なお，この場合も前項におけると同様に，過去の数値を，参考のために添えておく。

表8を見て分かることは，57年度の場合も58年度の場合も，各科とも安定した，かなり高い数値であるということである。この安定した，高い数値というのは，参考に挙げた過去の年度の数値を見ても分かる通りである。

要するに，調査書成績と学業成績との関連は，この調査で見ると，かなり強いと言えるであろう。つまり，高校時代において学業成績の良かった者は，大学の学業成績においても概して良く，逆に，高校時代において学業成績の振るわなかった者は，大学においても学業成績は概して

振わなかったということなのである。

表8 入学年度別、科別、調査書成績と学業成績との相関係数

科 入学年度	W	X	Y	Z
58	0.610	0.952	0.960	0.943
57	0.624	0.913	0.931	0.862

参考

科 入学年度	W	X	Y	Z
56	—	0.860	0.954	0.944
55	—	0.866	0.957	0.942
54	—	0.747	0.857	0.923

なお、この調査書成績と学業成績との関連を検討するにあたっては、本来、現役と浪人とを区分する必要があると思われる。何故ならば、浪人の場合には、高校時代の評定平均値以上の学力を浪人することによってつけたとも考えられるからである。この観点に立って、現役のを対象とした場合の調査書成績と学業成績との相関係数も算出してみたが、表8の数値とそれほどの差はなかつた⁽⁷⁾。

(3) 高校群別に視た調査書成績と学業成績との関連について

この項は、あるひとつの科に関して、高校群間に調査書成績と学業成績との関連に差があるかどうかを調査した結果の報告である。つまり、一言で言えば、高校間に格差があるかどうか、ということについての雑把な調査ということである。但し、ここでは、各高校別に調査するに足る十分な標本数が得られないので、前述した高校群別の調査であるに過ぎない。また、ひとつの高校群の中には、いわゆる進学“一流校”から“三流校”まで含まれるわけであるから、高校群として一括して扱うことには無理のあることも承知しているつもりである。しかし、それでも何らかの資料は得られるのではないかと思う次第である。

さて、表9は、ある科について、高校群別に、調査書成績の平均値と学業成績の平均値を示したものである。例えば、B欄は、都内国・公立高校出身者の場合であって、その全員の調査書成績を平均すれば、その数値は3.66となり、同様に本学での学業成績を平均すれば2.45となったということである。C群以下も同様である。また、表10は、当該科全員の調査書成績平均値と学業成績平均値とを基準にして、各高校群別に、期待される学業成績の平均値と、その平均値を実際の学業成績の平均値と比較して算出したその達成率を示したものである。例えば、B群の場合、調査書成績の平均値3.66がであれば、科の平均値から推して、学業成績の平均値は2.38でいいわけであるが、実際には2.45であったわけなので、その達成率は102.9%ということになるわけで

ある。なお、参考のために過去の数値も添えておく。

表9 昭和58年度入学，ある科における高校群別調査書成績平均値・学業成績平均値一覧

高校群	B	C	D	E	F	G
調査書成績平均値	3.66	3.66	3.79	3.40	3.82	—
学業成績平均値	2.45	2.44	2.48	2.42	2.28	—

表10 昭和58年度入学，ある科における高校群別調査書成績平均値を基準とした期待される学業成績平均値とその達成率

高校群	B	C	D	E	F	G
調査書成績平均値	3.66	3.66	3.79	3.40	3.82	—
期待される学業成績平均値	2.38	2.38	2.47	2.22	2.49	—
達成率(%)	102.9	102.5	100.4	109.0	91.6	—
57年度達成率(%)	104.4	97.1	99.6	84.0	98.7	91.0
56年度達成率(%)	101.8	93.7	103.6	90.8	100.9	81.7
55年度達成率(%)	103.8	99.1	100.8	92.0	91.6	87.1

さて、ここで達成率というのは、調査書成績に比して学業成績の出来具合はどうかというを表わしているわけであるから、100%を境にしてより上の数値が得られれば、調査書成績の割には学業成績が良かったということであり、下の数値であれば、その逆ということである。過去の数値も考慮してみると、結論的に言えることは、B群のみが継続して100%を超えていて、他の高校群の場合は年度による差があり、必ずしも、一定はしていないという結果であった。

要するに、全体として言えることは、調査書成績は、学業成績に対応していたが、高校群別に視ると差があったということなのである。従って、調査書成績を高校群を問わず（更に言えば、多分、高校を問わず）全く同一に取り扱うことには無理がありそうだということである。

(4) 学業成績の視点から

この項は、本学での学業成績の特に良かった者（各科上位10%）と、学業成績の特に悪かった者（各科下位10%）について、その入試成績の状況と調査書成績の状況如何について調査した結果である。

図1・図2は、年度別にZ科の学業成績上位者が、入試成績の平均値と調査書成績の平均値との関係において、どのような位置を占めていたかを個人個人×印で示したものである。図においては、縦軸が入試得点を示し、横軸が評定平均値の平均を示している。つまり、上方ほど入試成績が良く、また、右方ほど調査書成績が良いということである。

図1および図2を見て気の付くことは、×印がいずれの場合も、調査書成績平均値を示した線を境にして右側に多いということである。つまり、学業成績上位者のほとんどは調査書の成績も良かったということなのである。次に、×印の位置を、入試総得点の平均値を示した線を境にし

図1 昭和57年度入学者Z科学業成績上位10% (9名) の位置

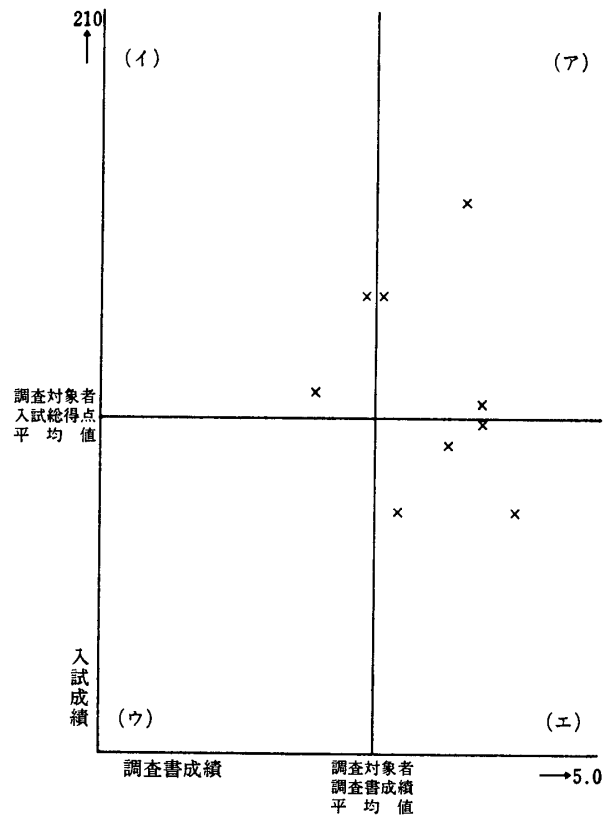


図2 昭和58年度入学者Z科学業成績上位10% (9名) の位置

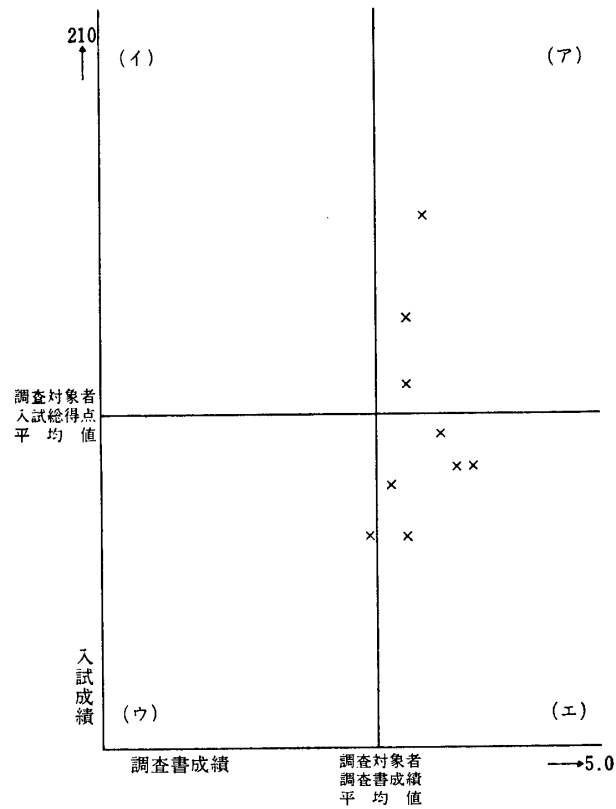


図3 昭和57年度入学者Z科学業成績下位10% (10名) の位置

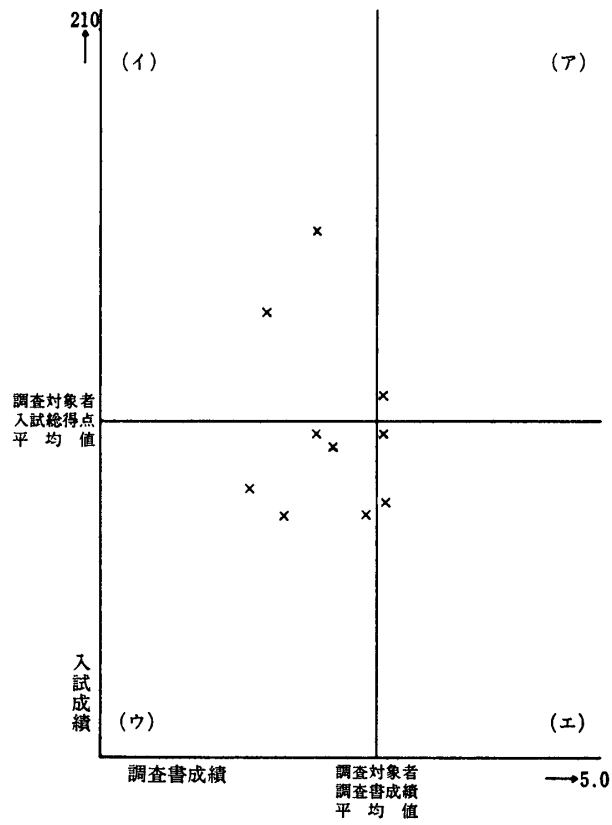
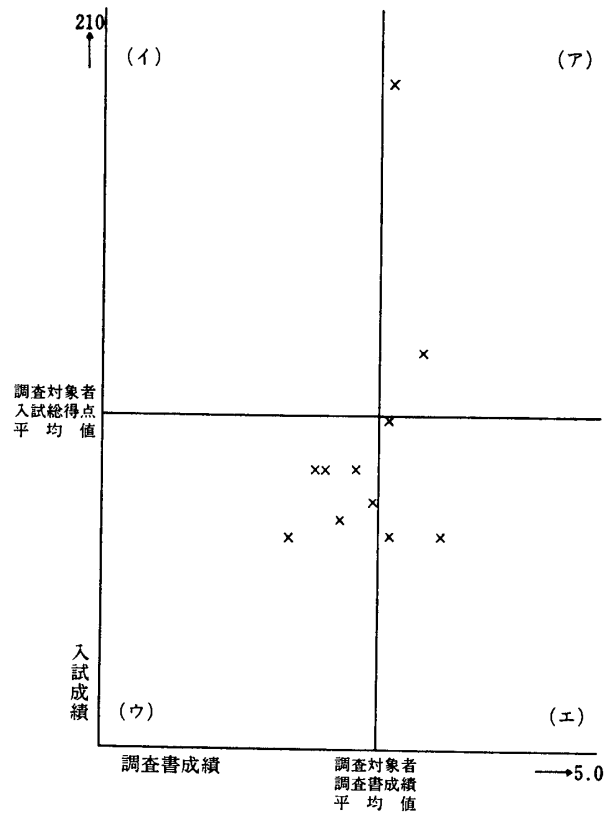


図4 昭和58年度入学者Z科学業成績下位10% (11名) の位置



てみると、上下のいずれの領域にも散在しているのがわかる。つまり、学業成績上位者は、入試成績においては、平均値より上位の場合も下位の場合もあったということなのである。

図3・図4は、学業成績下位者の場合である。図の基準のとり方は、図1・図2と全く同様である。図3における×印の位置は、調査書成績の平均値を示す線を境にすれば左側に多く、また、入試成績の平均値を示す線を境にすれば下方に多いという結果であった。図4の場合は、調査書成績の平均値を示す線を境にすれば、左右どちらにも×印が散在し、また、入試成績の平均値を示す線を境にすれば、これは明らかに下方に×印が多いということであった。つまり、学業成績不振者は、入試成績が平均値以下で、調査書成績も平均値に満たない場合が多いと言えそうである。もちろん、中には、入試成績も調査書成績も共に平均値を上回りながら学業成績は不振であったという者もいるが、全体的に見れば、このような者は例外に属するかと思われる。それに前項に述べた、高校間の「格差」といわれるものも考慮する必要がありそうである。

なお、各科別に、学業成績上位10%と下位10%の者について、入試成績平均値と調査書成績平

表11 昭和57年度入学、各科学業成績上位者の場合（人数）

領域 \ 科	W	X	Y	Z	計
㊦	4	5	6	3	18
㊧	0	0	3	2	5
㊨	0	1	5	0	6
㊩	2	6	4	4	16
計	6	12	18	9	45

- ㊦ 入試成績、調査書成績共に平均値以上
- ㊧ 入試成績は平均値以上、調査書成績は平均値以下
- ㊨ 入試成績、調査書成績共に平均値以下
- ㊩ 入試成績は平均値以下、調査書成績は平均値以上

表13 昭和57年度入学、各科学業成績下位者の場合（人数）

領域 \ 科	W	X	Y	Z	計
㊦	0	0	2	1	3
㊧	1	1	4	2	8
㊨	5	10	11	5	31
㊩	0	1	0	2	3
計	6	12	17	10	45

- ㊦ 入試成績、調査書成績共に平均値以上
- ㊧ 入試成績は平均値以上、調査書成績は平均値以下
- ㊨ 入試成績、調査書成績共に平均値以下
- ㊩ 入試成績は平均値以下、調査書成績は平均値以上

表12 昭和58年度入学、各科学業成績上位者の場合（人数）

領域 \ 科	W	X	Y	Z	計
㊦	1	8	4	3	16
㊧	0	1	1	0	2
㊨	1	2	4	1	8
㊩	2	12	13	5	32
計	4	23	22	9	58

表14 昭和58年度入学、各科学業成績下位者の場合（人数）

領域 \ 科	W	X	Y	Z	計
㊦	1	3	3	2	9
㊧	1	4	6	0	11
㊨	0	10	8	6	24
㊩	2	2	2	3	9
計	4	19	19	11	53

均値とを基準にして、それぞれ図1に示した(ア)、(イ)、(ウ)、(エ)のいずれの領域に何名づついたかを示してみると、表11・表12および、表13・表14のようになる。つまり、表11・表12から分かることは、学業成績上位者の場合、入試成績とは左程に関係なく、調査書成績の良かった者が多いということなのである。また、表13・表14によれば、学業成績下位者の場合は、入試成績も、調査書成績も共に良くない者に多いということなのである。このことは、表11～14を単純化して、単に、入試成績の平均値および調査書成績の平均値を基準にして書き改めると、より良く理解されると思う。表15は、入試成績平均値を基準にして、各科別に該当者が何人づついたかを示した

表15 入試成績平均値を基準にした場合

1) 昭和57年度入学, 各科学業成績上位者の場合(人数)

科	平均値以上	平均値以下	計
W	4	2	6
X	5	7	12
Y	9	9	18
Z	5	4	9
計	23	22	45

2) 昭和57年度入学, 各科学業成績下位者の場合(人数)

科	平均値以上	平均値以下	計
W	1	5	6
X	1	11	12
Y	6	11	17
Z	3	7	10
計	11	34	45

3) 昭和58年度入学, 各科学業成績上位者の場合(人数)

科	平均値以上	平均値以下	計
W	1	3	4
X	9	14	23
Y	5	17	22
Z	3	6	9
計	18	40	58

4) 昭和58年度入学, 各科学業成績下位者の場合(人数)

科	平均値以上	平均値以下	計
W	2	2	4
X	7	12	19
Y	9	10	19
Z	2	9	11
計	20	33	53

だけのものであるが、学業成績上位者の場合は、入試成績とはあまり関係のないことが分かるか

表16 調査書成績平均値を基準にした場合

1) 昭和57年度入学, 各科学業成績上位者の場合(人数)

科	平均値以上	平均値以下	計
W	6	0	6
X	11	1	12
Y	10	8	18
Z	7	2	9
計	34	11	45

2) 昭和57年度入学, 各科学業成績下位者の場合(人数)

科	平均値以上	平均値以下	計
W	0	6	6
X	1	11	12
Y	2	15	17
Z	3	7	10
計	6	39	45

3) 昭和58年度入学, 各科学業成績上位者の場合(人数)

科	平均値以上	平均値以下	計
W	3	1	4
X	20	3	23
Y	17	5	22
Z	8	1	9
計	48	10	58

4) 昭和58年度入学, 各科学業成績下位者の場合(人数)

科	平均値以上	平均値以下	計
W	3	1	4
X	5	14	19
Y	5	14	19
Z	5	6	11
計	18	35	53

と思う。学業成績下位者の場合は、どう見ても入試成績の良くない者の方が多数を占めていたということである。また、視点を変えて、調査書成績平均値を基準にして各科別に区分したのが表16である。表を見れば分かる通り、学業成績の上位者は、大部分が調査成績の平均値を上回っており、逆に、学業成績下位者は、その多数が調査書成績平均値を下回っていたのである。

5. おわりに

今回まとめた分に関して要点を記せば、次のようになるかと思う。

- 1) 入学試験における成績は、本学における二ヶ年間の学業成績と密接な関連があるとは必ずしも言えない。
- 2) 高校在学中の学業成績は、本学における二ヶ年間の学業成績とかなり密接な関連がある。
- 3) 調査書記載の評定平均値の平均を、高校を問わず、同一に評価するには無理がありそうである。
- 4) 1), 2) に述べたことと関連するが、本学において学業成績の良かった者は、入試の成績にかかわらず、調査書の成績の良かった者に多く、学業成績の悪かった者は、入試の成績と調査書の成績が共に悪かった者に多かった。

以上のような結果は、前回までの報告とほとんど同じである。従って、毎回同じような指摘になるが、短時間の少数科目だけの学力試験を中心とした入学者選抜ではなく、多面的な選抜、例えば、調査書(学業成績のみでなく諸活動も含む)の比重を高めたり、面接や小論文的なものを課すなど、いろいろな尺度、いろいろなフィルターを通して選抜する必要があるのではないかということなのである。

最後に、資料の閲覧にあたってご配慮いただいた短大当局に謝意を表したい。

注(1) 除外した者の数は、昭和57年度入学者の場合、学内推薦132名を含む143名であり、昭和58年度入学者の場合、学内推薦120名を含む132名であった。

(2) 昭和57年4月より専攻分けをした学科があるので、従来よりひとつ増えて4つの分類とした。仮にこれを、従前に倣って、W科、X科、Y科、Z科とする。

- (3) 評価A～Dの区分は次の通りである。すなわち、評価80点以上がA、70～79点がB、60～69点がC、59点以下がDである。
- (4) 例えば、ある学生について、評価Aが13科目、評価Bが7科目、評価Cが5科目、評価Dが1科であったとすれば、当該学生の学業成績は、 $(13 \times 3 + 7 \times 2 + 5 \times 1) \div (13 + 7 + 5 + 1) = 2.23$ となる。以下、数値の算出はいずれも4捨5入した。
- (5) 例えば、入試成績と学業成績との相関を求める場合に、入試成績の最高は210（あるいは230）であるのに対し、学業成績の最高は3.00であるので、学業成績の方には200/3を乗じて、最高が入試成績の最高と同程度になるようにしたということである。また、相関係数の算出にあたっては、 $r = \frac{\sum xy}{\sqrt{\sum x^2 \cdot \sum y^2}}$ を用いた。
- (6) 調査書成績の段階区分においては、いわゆる「学校差」ということは一切考慮に入れていない。一流校であろうと三流校であろうと、4.0は4.0、3.5は3.5として区分した。
- (7) 現役のみを対象とした場合の相関係数は次の通りであった。

科(専攻) 入学年度	W	X	Y	Z
58	0.400	0.952	0.942	0.989
57	0.855	0.960	0.939	0.793